

「四国遍路とルルド巡礼の巡礼接待」

Hospitality of Shikoku Pilgrimage and Lourdes Pilgrimage

藤沢 真理子

Mariko Fujisawa

愛知東邦大学人間健康学部

本稿では、四国遍路とルルド巡礼の巡礼接待を比較検討した。両者は仏教巡礼地とキリスト教巡礼地という違いがあるが、巡礼接待では共通点がみられる。両者は病や障害を癒してほしいという人類の共通した願いに応える巡礼地であり、そして巡礼者に対して手厚い支援、巡礼接待を行っている。四国遍路の巡礼接待では、ハード面として四国の美しい緑や海や山や川、そして新鮮な空気によって遍路たちは癒され、札所、宿坊、札所をつなぐ遍路道、そして善根宿等などによって援助を受けている。ソフト面としては、お接待と呼ばれる巡礼接待が地域住民や接待講などによって継続している。一方、ルルド巡礼の巡礼接待では、ハード面としてピレネー山脈麓の自然、空気、水が巡礼者たちを癒してくれる。そして、病院や教会や宿泊場所となる修道院等によって援助を受けている。ソフト面としては、ボランティアやオスピタリテなどから温かきもてなしを受けている。両者とも病気が治らなかったとしても巡礼することで「生きている」、そして明日へのエネルギーを感じることができる巡礼地であることが明らかになった。

はじめに

筆者は「なぜ人は援助するのか」というテーマで研究を進めてきた。最初、卒業論文ではがん患者を支援する「ホスピス」研究に取り組んだ。しかし、1980年代日本ではホスピスが根付かないのではないかと言われていた。それは、1967年イギリスのシシリー・ソンドースによってセント・クリストファー・ホスピスが創設されたことから始まり、欧米のホスピスはキリスト教をベースにして発展していた。日本のようにキリスト教をベースにしていない国ではホスピスは根付かないのではないかと1980年代には考えられていたのである。

筆者はホスピス研究を進める中で、ホスピスの歴史がキリスト教巡礼接待を起源とすることを知った。そこで、日本に巡礼接待の文化はないのかと振り返った時、自分が生まれ育った四国に巡礼接待、「お接待」の文化があった。子どもの時から八十八番札所大窪寺を熱心に信仰していた祖母に連れられて大窪寺へ行っていた。薄暗い本堂には数多くの松葉杖やギブスが奉納されていた。大人になってから、それが病や障害を治してほしい、救ってほしいと願う人々の奉納したものであることを知った。

四国遍路は、「お四国病院」と言われるほど、さまざまな病を抱える人たちが病氣平癒を願い巡っており、遍路道

のあちこちには病氣平癒の蹟が建てられている。人々は身体の病、心の病、そして様々な社会的な病を抱えながら、弘法大師と同行二人で四国遍路を巡っている。ある時は、四国の自然の美しさや偉大さに癒され、ある時は「お接待」してくれる人々に癒され、四国を巡っている。

本稿は、仏教巡礼である四国遍路とキリスト教巡礼のルルド巡礼について、文献研究ならびに四国八十八カ所における聞き書き調査、そして両者の巡礼への参与観察から、四国遍路とルルド巡礼の巡礼接待について比較検討していきたい。

第1章 巡礼とは

巡礼とは、単なる旅とは異なり、「巡る」ことを意味する。

最初に、巡礼の類型化を考えておきたい。小嶋博巳「遍路と巡礼～その構造比較」を参考にして、①聖地の構造による分類、②聖地の信仰圏の広狭による分類、③巡礼者の資格制限の有無による分類、④巡礼期間の限定の有無による分類、⑤巡礼者の宗教的ステイタスによる分類、⑥巡礼者の集団性・組織性による分類という視点から分析する¹⁾。

まず、四国遍路は仏教巡礼であるが、①聖地の構造による分類としては「円環聖地型巡礼」であり、徳島県第1番札所霊山寺から始まり、高知県、愛媛県、そして香川県第88番札所大窪寺を巡る。②聖地の信仰圏の広狭による分類としては「中域信仰型巡礼」と言えよう。四国だけでなく全国から巡礼者は来るし、また最近では外国の巡礼者も少しずつ増えている。③巡礼者の資格制限の有無による分類としては「開放型巡礼」である。四国遍路をしている人たちは真言宗だけでなく他の宗派の仏教徒、そしてそれ以外の宗教の人たちも巡礼している。④巡礼期間の限定の有無による分類としては「随時型巡礼」である。春と秋のお彼岸の頃が多い。とくに、春の菜の花畑をチリンチリンと鈴の音を鳴らして歩くお遍路さんを見ると、四国の人々は春がきたことを実感する。⑤巡礼者の宗教的ステイタスによる分類としては「民衆の巡礼」といえる。もともと、四国遍路は香川県善通寺に誕生した空海が四国で修業し、それにならい僧や山伏たちが修行の場としてきたが、江戸時代から民衆が巡るようになった。⑥巡礼者の集団性・組織性による分類としては「集団巡礼」「個人巡礼」がある。昭和28年から伊予鉄バスが初めて遍路バスを運行²⁾して以来、バスツアーは定着している。また、成人への通過儀礼として同じ地区に住む若者や娘が数人で巡る若者遍路や娘遍路の習慣もあった。自動車が普及してからは観光を兼ねた家族や仲間での四国遍路ということも増えている。また近年の特徴としては定年退職した人や若者が自分への挑戦として歩き遍路をしている。

次に、フランスのルルド巡礼について分析する。ルルド巡礼はキリスト教巡礼であるが、①聖地の構造による分類としては「単一聖地型巡礼」である。目的地はルルドであり、家から聖域を目指し、巡礼後は家にもどる。②聖地の信仰圏の広狭による分類としては「広域信仰型巡礼」である。世界130カ国から年間500万人の巡礼者が訪れる。③巡礼者の資格制限の有無による分類としては「開放型巡礼」である。カトリックの信者が中心であるが、プロテスタントや無宗教などの人もいる。④巡礼期間の限定の有無による分類としては「随時型巡礼」であるが、ピレネー山脈の麓に位置し冬季は寒いので巡礼者は少ない。⑤巡礼者の宗教的ステイタスによる分類としては「民衆の巡礼」といえる。聖職者である神父やシスターも多いが、中心は一般信者である。⑥巡礼者の集団性・組織性による分類としては「集団巡礼」「個人巡礼」である。教区や教会単位でルルドツアーを企画し、神父が団長となって巡礼団として参加することが多い。個人で巡礼することもできるが、ミサは国際ミサでフランス語やスペイン語や英語などである。日本から巡礼団として参加すれば団長の神父による日本語ミサがルルドで行われる。

仏教巡礼地として代表的なものは、海外では、インド釈迦ゆかりの地「生誕の地・ルンビニー」「成道の地・ブッダガヤー」「初転法輪の地・サルナート」「入滅の地・クシナガル」などがあり、国内では、本稿で取り上げる四国遍路（弘法大師信仰）や西国三十三カ所霊場（観音信仰）などがある。全日本仏教会ウェブサイトには、仏教巡礼について「『巡礼』とは、遠隔の聖地に詣でることで自分自身の修行や信仰の再確認など世界の諸宗教でも重要な宗教儀礼として今でも盛んに行われています」と紹介されている³⁾。

キリスト教巡礼で中世の三大聖地とされているのが、ローマ巡礼（聖ペテロ）、エルサレム巡礼（イエス・キリスト）、サンティアゴ・デ・コンポステラ巡礼（聖ヤコブ）である。これら3カ所は現在でも巡礼する人は多い。19世紀以降の巡礼地として大規模なものは、本稿で取り上げるフランスのルルド巡礼（聖母マリア）やポルトガルのファティマ巡礼（聖母マリア）やメキシコのグアダルーペ巡礼（聖母マリア）などがある。イーブ・ボティノーは、キリスト教巡礼について「聖遺物、とくに聖者の遺体を礼拝しに行くことであった。だから、人々は殉教者、使徒、あるいはキリスト自身の墓に詣でたのである。」と書いている⁴⁾。

次の章では巡礼の動機について見ていきたい。

第2章 巡礼の動機について

第1節 四国遍路の動機について

四国遍路はもともと辺地を巡る修行僧たちの修練の場であった。江戸時代になり、民衆が四国遍路をするようになった⁵⁾。江戸時代の巡礼動機としては、弘法大師にとりつぎを願う信仰、魂を救うための悔い改め、病氣癒し、罪滅ぼし、死者への祈り、代参などがあった。現代のお遍路さんは、弘法大師信仰、悔い改め、病氣癒し、死者への祈りなどが動機であり、近年増えているのが自分へのチャレンジとして定年退職者や若者が歩き遍路をすることである。筆者は四国で生まれ育ったが、四国の人たちにとって四国遍路は人生の最期を迎える準備の一つではないかと考えている。例えば、Aさん（男性）はそれまで全く信仰心などない、神も仏も信じていないと言っていたが、定年退職を迎える頃に八十八カ所を巡り始め、亡くなった時にはお棺に納経帳や白衣を納めてもらっていた。Aさんの家族は「これで安心してあの世へ送ることができる」と言っていた。また、成人になるための通過儀礼として行っていた地域もある。例えば、伊予（現在の愛媛県）では、黒い装束で地区の仲間と四国遍路をする若者遍路の習慣があった⁶⁾。また、徳島では、嫁入り前に四国遍路をするという娘遍路の風習があった⁷⁾。若者遍路も娘遍路も無事に終えたら大人の仲間入りと考えられていた。以上のことから、四国の人間にとって四国遍路は暮らしに溶け込んだものと考えられる。次に、キリスト教巡礼について見ていきたい。

第2節 キリスト教巡礼の動機

本稿で取り上げたルルド巡礼はキリスト教巡礼としては比較的新しいので、中世の代表的なキリスト教巡礼地のサンティアゴ・デ・コンポステラ巡礼で動機を考えると、その時代には聖ヤコブにとりつぎを願う信仰、魂を救うための悔い改め、病氣癒し、罪滅ぼし、死者への祈り、代参などが動機となっていたが、現代では、信仰（聖ヤコブにとりつぎを願う）、悔い改め、病氣癒し、死者への祈り、そして四国遍路の歩き遍路のように、自分へのチャレンジ（サンティアゴ・デ・コンポステラ巡礼路は世界遺産でありフランスからの道は全長738km）⁸⁾が考えられる。

ルルド巡礼は、1858年貧しい少女ベルナデットの前に聖母が出現したことから始まっている。聖母が出現した洞窟

では泉が湧き出ており、その水が多くの人を癒してきた。その評判からルルドに多くの人が巡礼するようになり、年間500万人以上の巡礼者が訪れる。ルルドでは現代医学で解明できない、難病といわれた人々が治癒された事例が報告されている。

カトリック教会では、信者が病気で入院したり手術を受けることになると、神父やシスターや教会の人たちがルルドの水を病室に届けてくれる。2007年、筆者がルルド巡礼をした時の巡礼団の中に病院で働くシスターが参加していた。彼女は病院や教会の人たちから頼まれて10リットル入りプラスチック容器をいくつも持参して、ルルドの水を持ち帰っていた。現在でも、ルルド巡礼は病を癒す巡礼地として信仰されている。

次に、巡礼における癒しについて見ていきたい。

第3章 巡礼における癒し

第1節 四国遍路における癒し

四国遍路では、お遍路をして病が治ったという話をあちこちで聞く。ここでは、22番札所平等寺の箱車を紹介したい⁹⁾。平等寺の由緒書きによると、「大正10年（1921）、林之助（当時31歳）は脊髄の病気により下半身が痺れ歩行が困難になりました。父福次（当時54歳）は多くの医者を訪ね、あらゆる治療法を試しましたが回復せず、次第に症状は悪化していきます。2年後には麻痺が上半身にも及ぶようになり、林之助は松葉杖を使うこともできなくなりました。もはや弘法大師におすがりするしかない。」「大正12年（1923）10月、四国の山や野、川を何とか越えて、愛媛、香川、徳島と順打ちし22番平等寺まで到着します。よほど疲れていたのか寺に4週間滞在したようで、万病に効くという『弘法の霊水』を飲んだり、当時の住職谷口津梁師から加持祈祷を受けたりしながら過ごしていました。するとある日、林之助の身体は一本の杖（金剛杖）を使えば歩行できるまでに回復。もはや乗る必要のなくなった『箱車』は本尊薬師如来に奉納し、自分の足で残りの札所を巡拝しながら土佐へ帰郷されたといえます。」と紹介されている。

筆者が子どもの時から行っていた八十八番札所の大窪寺にも、病や障害が治ったとして、本堂や本堂横に松葉杖やギブスがうず高く積まれていた。

第2節 ルルド巡礼における癒し

次にルルド巡礼における癒しについて見ていきたい。

ノーベル生理学・医学賞を受賞したアレクシー・カレルは、1902年、まだ若い医師だったころ、ルルドの癒しを自分の目で確かめたいと思い、病人の巡礼団に同行した。カレルはルルドへ行く汽車の中で巡礼団長と話す。『「回復を希望してこの長い旅行の苦しみにも耐えたのに、希望が裏切られた人たちは、絶望と疲労のために、死んでしまうでしょうね。』『ドクター、あなたは信仰を考えに入れていらっしゃいませんよ。治らなかった者も慰めを得て帰って来ますし、死ぬ場合にも、やはり喜びで一杯ですよ。』』¹⁰⁾そして、カレルはルルドにおいて結核性腹膜炎の女性が目の前で治っていく体験をし、それを『ルルドへの旅・祈り』の中に記している。

2017年に105歳で亡くなった医師の日野原重明は、2003年9月にルルド訪問した時、「奇跡を検討する医学証明委員会の責任者の医師から、その医学的説明を聞くことができました。『科学の力で説明できないからといって、非科学的だとは言えない』ということも学びました。」と書いている¹¹⁾。

遺伝子の研究者である村上和雄筑波大学名誉教授は、「アメリカの大学では、『信仰者の祈りが病人の血液中の免疫

力を高め、人間のもつ治癒力を強化する』という報告がある。」と朝日新聞2003年9月27日に書いている¹²⁾。

筆者がルルド巡礼をした時、世界中から集まった多くの病人や障害をもつ人たちが巡礼に来ていた。ルルドの聖域は、車いすやストレッチャーに乗った人でいっぱいだった。そして、聖母が出現した洞窟の泉では豊富な水が湧いており、誰もが飲むことができるように聖域内に多くの蛇口が用意されていた。また、沐浴施設があり、ルルドの水で沐浴できるように、世界中から集まったボランティアやオスピタリテたちが活躍している。ルルドの聖域では、夜にローソク行列、昼に聖体行列が行われている。また、ルルドの聖域内には複数の教会が建てられており、フランス語、英語、イタリア語、オランダ語、ドイツ語などのミサが行われる。修道院の中には宿泊所を提供しているところもあり、巡礼者たちに温かい食事と寝床を用意している。ルルドの聖域には病院もあり、病気や障害をもつ人が安心して巡礼できる設備が整っている。

第4章では、巡礼接待について考えていきたい。

第4章 巡礼接待について

第1節 四国遍路のお接待

四国では、四国遍路に関する事柄を親しみや尊敬を込めて「お」をつけることが多い。例えば、四国遍路は「お四国さん」、四国遍路をしている人は「お遍路さん」、信仰の中心である空海、弘法大師を「お大師さん」、そして四国遍路における巡礼接待を「お接待」と呼ぶ。

筆者は八十八カ所の札所で定期的なお接待の聞き書き調査を行なった時に、あるお寺の住職さんから「お接待の心は相互供養である」とお聞きした。高野山霊宝館ウェブサイトには、『胎蔵曼荼羅』に描かれている諸尊は、それぞれの存在の意義を発揮しながら、相互供養し、大日如来のこの世の全ての生命を生かす大いなる生命ならびに慈悲や智慧を分担し、衆生を救済し、悟りの世界が得られるよう衆生を導いている働きを表しています。」と書かれている¹³⁾。

四国遍路において、「お遍路さんを弘法大師と同行二人ととらえ、お大師さんにするようにお接待する」、そして、お遍路さんは「自分が難儀している時にお接待してくれる人はもしかするとお大師さんではないかと思う」と答えた人がいた。弘法大師を通して、相互供養している関係が考えられる。

お遍路さんを過去、現在、未来で分類すると、①既遍路、②現遍路、③未遍路と考えられる。筆者の聞き書き調査の中でも、①既遍路、つまり過去に遍路したことがある人は、「自分が遍路した時にお接待を受けて嬉しかったので、今お接待をしているんですよ」と答えた人がいた。また、②現遍路の場合、遍路をしている人同士でお接待をする場合がある。例えば、車で四国遍路している人が足を痛めた歩き遍路を見かけ、車のお接待で次の札所へ連れていくなどである。そして、③未遍路は、今は仕事や介護などで巡礼することができないが、将来お遍路してみたいと考えている人であり、お接待をすることで自分の代わりに巡ってくれている遍路への感謝、そして「お接待することで自分も遍路に参加している気持ちがします」と答えた人もいた。

四国遍路では、「亡くなった家族のために、死者供養の目的で、命日に善根宿をしています」という人もいる。また四国の対岸である岡山県や和歌山県などから毎年四国に来て、札所でお接待を継続している接待講も長い歴史を持っている。

第2節 ルルド巡礼の巡礼接待

キリスト教巡礼接待は、聖書のマタイ25・35-40「お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渴いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ。(中略) わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。」¹⁴⁾というイエスの教えを実践していると言えよう。

また、キリスト教における教えとして「神を愛し、隣人を愛せよ」がある。隣人とは誰かという律法の専門家の問いに対して、イエスは、聖書ルカ第10章30-37で答えている¹⁵⁾。「ある人がエルサレムからエリコに下って行く途中、追いはぎに襲われた。追いはぎはその人の服をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。ある祭司がたまたまその道を下って来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。同じように、レビ人もその場所にやって来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。ところが、旅をしていたあるサマリア人は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い、近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乘せ、宿屋に連れて行って介抱した。そして、翌日になると、デナリオン銀貨二枚を取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『この人を介抱して下さい。費用がもっとかかったら、帰りがけに払います』さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。律法の専門家は『その人を助けた人です。』そこで、イエスは言われた。『行って、あなたも同じようにしなさい。』」聖書に書かれているように、キリスト教巡礼接待は隣人を助ける行いと考えられる。

ルルドに来る多くの人たちは、重病であったり重い障害をもっている場合がある。その人たちを支援するために、ルルド聖域ウェブサイトでは、一般のボランティアと病人の世話をするオスピタリテに分け、募集している¹⁶⁾。オスピタリテは研修や推薦が必要であり、オスピタリテとして活動したノートルダム清心女子大学須沢かおりは「信徒の国際的奉仕組織である聖母のオスピタリテの献身的な奉仕活動によってルルド聖域は運営されている」という¹⁷⁾。彼女は2009年ルルドの聖母オスピタリテの会員になることを志願し、5年間の養成期間を終え、「カトリック教会とオスピタリテからの最終的な承認を経て、2014年9月、引き受けと誓約の式において、ルルドの聖母オスピタリテの正会員になった。」¹⁸⁾と書いている。

筆者がルルド巡礼をした時に、巡礼者たちを世話しているシスターは「ここでは、ベルナデットの体験、貧しく文字も読めなかった少女ベルナデットの前に聖母が出現し1人の人間として大切にしたこと、それをルルドに来られた病人の人々に体験してもらうことが大切だと思います。」と言っていた。

2020年新型コロナウイルス感染が拡大する前には、年間500万人がルルドを訪れていた。ルルド巡礼では自分自身が病気や障害をもつ人も多いが、病人の家族や友人たちが一日も早い病人の回復を祈る場合も多い。重い病気や障害をもつ人たちは、多くの人に支えられ、全世界から様々な犠牲を払いながらやってくる。実際のところ、ルルドで聖母に祈りをささげても病人がみな治るわけではない。しかし、治らなかった人も世界中から集まった病人や重い障害のある人たちとルルドで出会い、苦しんでいるのは自分だけではないと感じる。そしてルルドにおいて、ボランティアやオスピタリテなどから温かいもてなしを受け、巡礼に来る前とは違う「新しい力」「生きる力」を得て、故郷へもどっていく。

第5章 巡礼接待の具体例

第1節 四国遍路におけるお接待の聞き書き調査

筆者が1991年4月から8月にかけて行った八十八カ所札所における定期的なお接待の聞き書き調査を紹介する。

四国八十八カ所の札所の中で、「定期的なお接待がある」と回答したのは、88カ所中62.5%であった。四国四県別の割合は、徳島県40.8%（23カ所中）、高知県25%（16カ所中）、愛媛県65.4%（26カ所中）、香川県82.6%（23カ所中）である¹⁹⁾。香川県は空海、弘法大師が誕生した場所であり、また対岸の岡山県などから接待講がお接待をしていたり、結願寺の大窪寺があることなどから定期的なお接待の割合が高いと考えられる。

次に、お接待の時期であるが、「春」が最も多く、78.9%であった。次いで、「夏」12.0%、「秋」5.2%が多く、「冬」3.5%は最も少なかった²⁰⁾。

お接待する側としては、「地区」40.0%、「個人」21.7%、「接待講」20.0%、「寺」6.7%、「ご詠歌グループ」5.0%、「その他」6.7%であった。その他としては、アマチュア無線グループやヨガグループなどであった²¹⁾。「地区活動として桜が咲く季節に札所でお接待をして、その後、地区の人たちとお花見をするのが何より楽しみです」と答えた人がいた。

お接待する動機としては、「弘法大師への信仰」50.0%、「地区活動として」16.7%、「先祖供養」15.1%、「願掛けや願い御礼」12.1%、「先祖から続けている」12.1%、「遍路中接待を受けた返礼」9.0%、「身代わり」7.5%、「相互供養」3%、「ギブエンドテイク」3%、「喜びを分かち合いたい」3%、「遍路助けたい」3%、「人に奉仕するため」3%、「遍路しやすいよう手伝う」3%となっている²²⁾。四国では空海、弘法大師をお大師さんと親しみをこめて呼んでおり、四国遍路のお接待文化が継続している大きな理由は、やはり弘法大師への信仰が大きい。空海に関する伝説は様々あるが、お大師さんは難儀している時に助けてくれる優しい面だけではなく、例えば室戸にあるくわす芋は空海が修行僧として芋を所望したのに村人が断ったことにより食べられない芋になったという伝説があるように罰を与える存在でもある。また、逆に空海が布を所望した時に機織りしていた布を切って渡した乙女は観音となったという伝説もある。空海について賞と罰の伝説が四国のあちこちにあり、人々は自然にお遍路さんに優しく接するようになったのではないかと考えられる。

お接待するものの種類としては、以下の通りである²³⁾。最も多いものは「餅・草餅」38.4%である。春になると、札所で餅つきをしてお接待しているという家族は先祖から続けているとのことであった。次に「お菓子」32%も多い。「みかん」25.6%は、愛媛県でいろいろな柑橘類がお接待されていることを聞いた。「ポケットティッシュ」17.9%も役立つ。「菓子パン」16.7%、「ジュース」15.4%、「ヤクルト」15.4%、「お茶」12.8%などの飲食物がお接待されている。「お金」12.8%は、都会からやって来たお遍路さんにとって戸惑うものと言っていた。しかし、四国の人にとって難儀しながらお遍路をしている人は自分の身代わりととらえたり、ペットボトルは重いので喉が渴いた時に自動販売機で飲み物を買ってくれればという思いでお金をお接待する。「手作り巾着袋」11.5%も役立つと言われていた。「うどん」10.3%は、香川県でお接待されることが多いものである。「タオル（日本タオル含む）」7.7%も汗をふくのに役立つ。「おすし」7.7%、「おにぎり」6.4%もある。「ふかし芋」6.4%は、高知県の札所近くにはお接待用のいも畑があり、収穫するとふかし芋にしてお遍路さんにお接待している。

愛媛大学教授竹川郁雄は第50番札所の繁多寺において2014年から2018年（毎年9月）調査をしている²⁴⁾。筆者の調

査は四国八十八カ所すべての札所で聞き書きを行ったものであるが、竹川郁雄の調査は一つの札所で実施しているという違いがある。最近のお接待の動向を知るためにこの調査を紹介したい。5年間で4994名の遍路に「お接待」について質問している。飲み物のお接待を受けた割合は、2014年62.4%、2015年57.7%、2016年52.5%、2017年62.9%、2018年78.9%と、60～70%の人が飲み物のお接待を受けていた。また、お菓子のお接待を受けた割合は、2014年59.7%、2015年44.2%、2016年40.2%、2017年46.4%、2018年60%と、40～50%の人がお菓子のお接待を受けている。お金については2014年6.6%、2015年7.7%、2016年6.8%、2017年5.3%、2018年6.9%と、5%前後の人がお金のお接待を受けたと回答している。この調査から飲み物やお菓子やお金のお接待が現在も続いていることが明らかである。

四国遍路のお接待として、特徴的なものが善根宿である。聞き書き調査でも、ある札所で今日は家族の命日なので善根宿をしたいという人に出会った。高知県では一年中善根宿をしている家もある。通常、お遍路さんは一夜の宿をお願いする。家の人はお遍路さんを招き入れたら、弘法大師の象徴である金剛杖を綺麗に洗って床の間に飾る。お遍路さんは仏壇等でお経を唱え、家の人は食事や風呂や寝床を用意する。そして、次の朝にはおにぎりなどお弁当を渡して見送る。しかし、なかには職業遍路と思われる人もおり、何日も善根宿に居座ることがある。お接待はあくまでも善意であるが、それを悪用することは歴史的に繰り返されている。江戸時代、土佐藩では冬でも霜が降りない温暖な気候なので時なし遍路が横行したことがあり、藩が遍路禁止令を出した時期がある。

現在のお接待として、車のお接待というのがある。筆者も四国遍路をしている時に、足を痛めた高校生のお遍路さんに出会い、「次の札所まで車でお連れしましょうか」というと、とても喜ばれた。「お大師さんかと思った」と言われ、恐縮した覚えがある。筆者は区切り打ちという、何カ所かの札所を区切りながら遍路していたのだが、その高校生とはその後数回出会うことになる。お接待を受けるだけでなく、お接待をするとはどういうことかをその高校生たちに教えてもらった。

四国遍路は全長1400キロに及ぶ道であり、札所は田んぼの中にあったり、山の中にあたりと道に迷うことが多い。そのような時に道路標識はとても役立つ。歩き遍路が主であった江戸時代から道普請やへんろ道の表示などのお接待が現在まで続いている。特に、へんろみち保存協力会は歩き遍路のために道路修繕や表示設置に尽力している²⁵⁾。

近年インターネットの普及などで、情報のお接待も重要となっており、四国八十八カ所霊場会英語版やTOURISM SHIKOKUやJAPAN VISITORなどがある。また、徳島大学モートン常慈准教授は「外国人と遍路」というテーマで研究をしており、その成果を発信している²⁶⁾。

今後30年以内に70～80%の確率で起こると言われている南海トラフ地震に備える必要がある。高知県ではお遍路さんたちは海沿いの道を歩く。高知県黒潮町は全国一の津波高34.4メートルが予測されている地域であり、もし津波が起こったら、いち早く津波タワーへ避難する必要がある²⁷⁾。避難タワーの位置や避難方法などを知らせることも情報のお接待として重要である。

お遍路さんは四国遍路の中で、お接待を受け、人の温かさにあふれる。歩き遍路にとって、四国遍路の道は厳しいものであるが、八十八カ所を打ち終えた時に達成感を得られる。歩き遍路はひたすら歩くことで自分を見つめなおす時間になる。多くの歩き遍路が、肉体的に疲れるが、精神的にスピリチュアル的にエネルギーチャージされたと語る。

第2節 ルルド巡礼の巡礼接待事例

次に、ルルド巡礼について考えたい。巡礼接待する人は、キリスト教の教えである隣人愛や聖母への信仰などの動

機により巡礼接待をしている。

ルルド巡礼接待としては、泉の水がある。聖母が出現した洞窟で湧く水は持ち帰ることができるように整備されており、また沐浴できる設備もある。ミサは一日に数回教会や聖母出現の洞窟で行われている。夜にはローソク行列もある。また、ルルド巡礼では多くの病人や障害をもつ人が訪れるので、数多くの車いすやストレッチャーが用意されており、そのサポートをするボランティアたちも世界中から集まっている。特に聖域内で病人を世話するオスピタリテは重要な役割を担っている。

寺田淳子は大型巡礼団のオスピタリテをしているパリの看護婦グループと話をした。「どうして同じ病院に勤めている皆さんでいらっしゃるのですかと尋ねたところ、その病院で最初に誰かが来て『とにかくすごくいいから、いらっしやい』と口コミで友達が次々連れてこられたそうです。『うちの病院はもうだいたい来てるわよね。〇〇病院は?』『あそこもほとんど来てる。パリのめばしい病院はだいたいリクルート済みじゃない?』。彼女たちは普段から看護婦として働いていて、有給休暇をとって自腹を切って傷病者の看護をしに来ます。『なぜわざわざ仕事と同じことをしに来るんですか?』と質問とすると、顔を見合わせて『同じじゃあ、無いのよねえ』『確かに病気の人の手助けには来ているんだけど、パリで看護をしているときとは違うのよ、う〜ん、そうねえ』と考えていたのですが、『上手く違いが説明できないわ』。ただ、ルルドがパリといかに違うのかというたとえとして、パリに戻ってメトロの駅で両手に荷物を持って『ここはどこ? 私はだれ? って思う』と言われました。自分の居場所がまったく変わってしまって、自分自身も変わったような気がする、それくらい劇的な体験をルルドではする、ということだと思います。」と書いている²⁸⁾。

ここで、ルルド巡礼の一日について紹介する。

病気の人たちは傷病者用の施設に宿泊し、巡礼団のボランティアや家族はホテルに宿泊する。聖母が出現した洞窟でのミサは朝5時から11時までの間に様々な言語で行われる。また、洞窟前だけでなく、聖域内の教会や地下聖堂等でもミサが行われる。午前中、巡礼者たちはミサに参加したり、ベルナデットゆかりの地などを訪問する。聖母が出現した洞窟の上の小高い丘には十字架の道ゆきがあり、そこで祈る巡礼者もいる。

昼食はフランスではメインであり、病院やホテルでワインつきのフルコースが提供される。食事はケータリングサービスで、あらかじめメニューを選ぶようになっている。

沐浴は、午前10時から正午まで、そして午後2時から午後4時まで行われる。沐浴の水はルルドの泉から引かれており、15度くらいである。須沢かおりは、「身体を浸す水は、神の恵みを受ける感覚的しるしであり、カトリックの秘跡のような意味をもっている。水に清められ、癒され、新たな生を受けるルルドでの水浴は、実際に、人間の力を超える存在を体験できる場である。」という²⁹⁾。筆者もルルドで沐浴を体験したが、水に浸かるのは一瞬である。しかし、とても大きな力に包まれたような感覚があった。それは沐浴を援助してくれるオスピタリテの所作から感じたのかもしれない。

2012年から2014年までの夏にオスピタリテとして沐浴場で介助活動をした須沢かおりは「そこで経験したことは、ひとりひとりの心底からの、祈りは必ず神に聞き届けられるという確信であった。ルルドの水浴場で、命を刻む祈りが天に届けられる現場に多く立ち会った。ルルドの泉での水浴する者は、聖母の慈しみにふれ、感謝と平安を与えられる。傷病者は自分の病が治癒することを願って、遠路はるばるこの地にやって来たことだろう。実際にルルドで与えられるものは、病いが治るという癒しの奇跡ではなかったかもしれない、しかし、ありのままの自分を、その痛みと、

苦しみを受け入れて、神に差し出し、やがて来る人生の終わりに希望を紡いでゆくのである。」と書いている³⁰⁾。

第6章 新型コロナウイルス禍における巡礼

第1節 四国遍路における新型コロナウイルスの影響

2020年1月16日に日本国内で初めての新型コロナウイルス感染者が報告されてから、日本だけでなく世界中で感染が拡大した。日本では第一波、第二波、第三波、第四波、第五波と流行のピークがあり、その度に緊急事態宣言やまんえん防止等重点措置が、全国もしくは一部の都道府県に発令されてきた。

四国遍路もその影響を受け、2020年春八十八カ所札所の納経所を閉鎖するという対応を実施した³¹⁾。四国八十八カ所の巡礼者の多くはマイカーで行く人であり、家族や身近な人だけであれば感染のリスクが低く、また、札所では本堂や大師堂などの外で納経するため感染リスクが低いと考えられる。しかし、公共機関や大型バスで巡るお遍路さんたちは感染リスクが考えられ、ツアー催行が難しかった。四国八十八カ所霊場会ウェブサイトによると、2020年6月1日よりすべての札所は通常通り納経を受けることができるようになった³²⁾。

2020年10月27日に四国八十八カ所霊場会は、「賜弘法大師諡号1100年御待ち受け法会」を行なった。空海が弘法大師の名を授かって1100年を記念した法要である。もともとは高野山において大規模な法要を計画していたが、新型コロナウイルスの影響により、空海が誕生した香川県善通寺において規模を縮小して行われた。初めてのオンライン形式による法要であった。法要はリアルタイムで配信され、また終了後はYouTube動画としていつでも視聴することができる³³⁾。

また、四国八十八カ所霊場会は、新型コロナウイルスの終息を願って「御宝号88億回念誦プロジェクト」を立ち上げている。一人一人が御宝号「南無大師遍照金剛」を唱えた回数をフォームに入力して、新型コロナウイルス終息を願うものである。2021年9月27日現在の合計念誦回数は38,074,560回となっている³⁴⁾。これも新しい信仰の姿であろう。

第2節 ルルド巡礼における新型コロナウイルス感染拡大の影響

一方、ルルド巡礼であるが、フランスも新型コロナウイルス感染が拡大したため、通常の巡礼を行なうことが出来なくなった。ルルド巡礼を希望する人たちの多くは病気や障害を持っており、感染すると重症化するリスクがある。そのため、オンラインが重要である。ライブ配信は24時間行っているが、聖母が少女ベルナデットのもとに出現した18回目、最後となった7月16日を記念して、2020年7月16日、“ Lourdes United ” という史上初となるオンライン形式の巡礼が行われた³⁵⁾。

ルルドは、2020年3月から2か月間の閉鎖を経て5月16日に再開した。2020年には巡礼団による巡礼は中止となり、個人巡礼のみを受け入れている。聖母が出現した洞窟には病気を治すといわれる泉が湧き出ており、巡礼者たちはその水を飲むことを願っているが、コロナ禍で困難となっている。新型コロナウイルス感染拡大によって、ルルド聖域ウェブサイトにおいて毎日24時間のライブ配信やフェイスブックやツイッターやインスタグラムなどが提供され、そのアクセス数は増加している。

2021年、新型コロナウイルス感染拡大から一年以上経ても終息の見通しがたたず、2021年7月16日“ Lourdes United ” がオンラインで開催された³⁶⁾。朝7時から夜10時30分まで国際ミサや各国語によるロザリオの祈りがささげられた。2021年7月15日時点で、フランスの新型コロナウイルス感染者数は10,781人であり、日本は3,418人である³⁷⁾。

日本と比較して感染者数が多いが、ワクチン接種が進んでいるせいであろうか、2021年7月16日“Lourdes United”には多くの人が参加している様子が映っていた。

ルルド聖域ではソーシャルディスタンスを確保するために地面に白い丸を描いており、巡礼者たちはその上に立ち、ミサに参加している。ルルドでは病を癒したいという世界中の病人たちが集まり、例年であれば車いすやストレッチャーが聖域内にあふれるが、2020年も2021年もライブ配信を見る限り、車いすやストレッチャーの人は少なかった。対面型の大規模イベントは感染リスクが高まり重症化の可能性があるため、病人たちは参加するのが難しかったと思われる。そのため、ルルドではオンライン配信に力を注いでいる。ただ、ルルドの魅力は、ピレネー山脈の麓の自然を感じることに、聖母が出現した洞窟に湧き出る泉の水を飲むこと、沐浴すること、そしてボランティアやオスピタリテたちと触れ合い癒される体験をすることであり、残念ながらライブ配信では自然や水やオスピタリテとの触れあいを直接感じるができない。2020年と2021年の“Lourdes United”では、オンラインであっても世界中の人の祈りが一つになることを実感できるように工夫されていた。

コロナ禍で、四国遍路もルルド巡礼も、巡礼したいがなかなか巡礼することができない人のためにオンライン配信を活用している。四国遍路の場合弘法大師信仰、ルルド巡礼の場合聖母信仰という違いはあるが、両者は共通して、「巡礼したい」「祈りを捧げたい」という人々の強い気持ちにこたえようとしている。四国遍路やルルド巡礼は、その時代の医学では治癒が難しい病や障害を、弘法大師や聖母にとりつぎを願うことで、「治るかもしれない」「癒してもらえかもしれない」という民衆の願いの場である。筆者が幼い頃に見たギブスや松葉杖は多くの人の願いを象徴したものであった。時代とともに病や障害は変化していくが、人々の祈りは続いている。全世界で感染拡大した新型コロナウイルスによって、二つの巡礼地はオンライン形式という新しいスタイルを取り入れながら、癒しを求める願いにこたえようとしている。

まとめ

本稿では、四国遍路とルルド巡礼の巡礼者を支援する巡礼接待について比較検討してきた。

四国遍路における巡礼接待、Hospitalityをハード面とソフト面の2つの側面からみると、ハード面として、環境では、四国の美しい緑や海や山や川、そして新鮮な空気によって遍路たちは癒されている。また、建物や場所では、札所、弘法大師ゆかりの八十八カ所を巡ること、宿坊、札所をつなぐ遍路道、そして無料で遍路を宿泊させる善根宿等がある。ソフト面としては、お接待を通して、人のあたたかさを地域住民や接待講やお接待する個人や札所の寺院などから受け取る。また、札所で読経を奉納し、納経帳に御朱印を受け取る等によって、一歩ずつ前に進んでいくプロセスがあることが明らかとなった。

ルルド巡礼における巡礼接待、Hospitalityを2つの側面からみると、ハード面として、ルルド巡礼の環境は、ピレネー山脈麓の自然、空気、水が巡礼者たちを癒してくれる。そして、建物や場所は、病人をケアしてくれる病院やミサが行われる教会や宿泊を提供してくれる修道院等がある。ソフト面としては、人のあたたかさを、看護師や医師や聖職者や世界から集まったボランティアやオスピタリテ等から受け取る。また、沐浴やミサや聖体行列やローソク行列等により巡礼者たちは一体感を感じ、病気が治らなかったとしても「生きている」そして明日へのエネルギーを感じることができると明らかになった。

本稿では、四国遍路とルルド巡礼が仏教巡礼地とキリスト教巡礼地という違いはあるが、病や障害を癒してほしい

という人類の共通した願いに応える巡礼地であり、そして巡礼者を支援する巡礼接待の特徴について明らかにしてきた。今後もさまざまな援助について研究を進めていきたい。

日本仏教社会福祉学会第55回学術大会シンポジウムにて報告が本稿をまとめるきっかけになったことに、心より感謝したい。

引用文献

- 1) 小嶋博巳「遍路と巡礼～その構造比較～」四国遍路と世界の巡礼編集委員会編『四国遍路と世界の巡礼：平成15年度愛媛大学国内シンポジウムプロシーディングス』2004年、4～5頁。
- 2) 伊予鉄ウェブサイト
<https://www.iyotetsu.co.jp/sp/bus/kashikiri/junpai.html>、2021年9月20日検索。
- 3) 全日本仏教会ウェブサイト
<http://www.jbf.ne.jp/event/Hallowed.html>、2021年9月18日検索。
- 4) イーヴ・ボティノー『サンチャゴ巡礼の道』河出書房新社、1986年、93頁。
- 5) 頼富本宏『四国遍路とはなにか』角川学芸出版、平成21年、204頁。
- 6) 藤沢真理子『風の祈り：四国遍路とボランティアズム』創風社出版、1997、11頁。
- 7) 愛媛県生涯学習センターウェブサイト「四国遍路のあゆみ（平成12年度）」
<https://www.i-manabi.jp/system/regionals/regionals/ecode:1/10/view/1776>、2021年9月20日検索。
- 8) UNESCO “Routes of Santiago de Compostela: Camino Frances and Routes of Northern Spain”,
<https://whc.unesco.org/en/list/669/>、2021年9月20日検索。
- 9) 22番札所の平等寺ウェブサイト
<https://byodoji.jp/>、2021年9月20日検索。
- 10) アレクシー・カレル『ルルドへの旅・祈り』春秋社、1983年、15頁。
- 11) 日野原重明「私の証・あるがまま行く」朝日新聞2003年9月27日付け。
- 12) 村上和雄、朝日新聞2003年9月27日付け。
- 13) 高野山霊宝館ウェブサイト
<http://www.reihokan.or.jp/syuzohin/hotoke/mandara/ryobu.html>、2021年9月15日検索。
- 14) 「マタイ25章」共同訳聖書実行委員会編『聖書 新共同訳—旧約聖書続編つき』日本聖書協会、1987、(新) 58頁。
- 15) 「ルカ10章」共同訳聖書実行委員会編『聖書 新共同訳—旧約聖書続編つき』日本聖書協会、1987、(新) 147頁。
- 16) ルルド聖域ウェブサイトにおいて、ボランティアについては<https://www.lourdes-france.org/en/volunteering-sanctuary/>、
オスピタリティについては<https://www.lourdes-france.org/en/become-hospitaller/>、2021年9月20日検索。
- 17) 須沢かおり「ルルド研究序説（1）—祈りの聖地が生み出す共同性」『ノートルダム清心女子大学キリスト教文化研究所年報』第37巻、2015年、5頁。
- 18) 須沢かおり、前掲論文、6頁。
- 19) 藤沢真理子、前掲書、90-92頁。
- 20) 藤沢真理子、前掲書、93頁。
- 21) 藤沢真理子、前掲書、93-94頁。
- 22) 藤沢真理子、前掲書、94-98頁。
- 23) 藤沢真理子、前掲書、99-102頁。
- 24) 竹川郁雄「四国遍路における現代の『お接待』—四国遍路巡拝記における『お接待』の諸相」『四国遍路と世界の巡礼』

第5号、2021年4月、32頁。

- 25) へんろみち保存協会ウェブサイト
<http://blog.iyohenro.jp/>、2021年9月20日検索。
- 26) TOURISM SHIKOKUは<https://shikoku-tourism.com/en/shikoku-henro/shikoku-henro>、JAPAN VISITORは<https://shikoku-tourism.com/en/shikoku-henro/shikoku-henro>、また、徳島大学モートン常慈准教授は「外国人と遍路」について研究をしており、研究報告は<http://pub2.db.tokushima-u.ac.jp/ERD/person/310232/work-ja.html>、2021年9月20日検索。
- 27) 黒潮町ウェブサイト「津波避難タワー」
<https://www.town.kuroshio.lg.jp/img/files/pv/kouhou/docs/201707/12-13.pdf>、2021年9月20日検索。
- 28) 寺戸淳子『時代に挑む巡礼者～傷病者巡礼が問いかけるもの』かわさき市民アカデミー出版部、2008、51頁。
- 29) 須沢かおり、前掲論文、16頁。
- 30) 須沢かおり、前掲論文、18頁。
- 31) 四国八十八カ所霊場会ウェブサイト「緊急事態宣言における四国八十八カ所霊場の対応一覧表」
<https://www.facebook.com/413617888692613/photos/pcb.2830188627035515/2830187927035585/?type=3&theater>、2021年7月1日検索。
- 32) 四国八十八カ所霊場会ウェブサイト「新型コロナウイルス感染対策」
<https://88shikokuhenro.jp/korona-kannsenntaisaku/>、2021年7月1日検索。
- 33) KSB瀬戸内海放送「善通寺で弘法大師1100年記念オンライン法要」
<https://www.youtube.com/watch?v=LwgeiG5gRWs>、2021年7月1日検索。
- 34) 四国八十八カ所霊場会ウェブサイト「御宝号88億回念誦プロジェクト」
https://88shikokuhenro.jp/88million_nennjyu_project/、2021年9月27日検索。
- 35) Lourdes United 2020
https://www.lourdes-france.org/wp-content/uploads/2020/07/affiche-programme-Lourdes-united_EN.pdf、2021年7月1日検索。
- 36) Lourdes United 2021
<https://www.lourdes-france.org/en/lourdes-united-2021/>、2021年9月20日検索。
- 37) NHK特設サイト「新型コロナウイルス」、2021年7月15日時点の日本の感染者数は<https://www3.nhk.or.jp/news/special/coronavirus/data-all/>、フランスの感染者数は<https://www3.nhk.or.jp/news/special/coronavirus/world-data/>。